

牧師 山本護	奏楽 山本恵美	第一部礼拝	司式 青柳明美	9:30~10:30
※讃美歌は二番までうたいます		第二部礼拝	司式 福田奈里子	11:00~12:00
前 奏 黙想		讃美歌	532	ひとたびは死にし身も
讃美歌	55 今日ひかりを	献金		
祈 禱		讃 詠	547	いまささぐるそなえものを
聖 書 ヨブ記 11:7~9		黙 禱		
コリントの信徒への手紙一 15:12~13		主の祈り	564	
讃美歌 II-161 輝く日を仰ぐとき		頌 栄	541	父、み子、みたまの
説 教 『キリストの復活、私の復活』		祝 禱		
祈 禱		後 奏		※信仰告白は省略します

復活祭からずっと、キリスト復活に関する御言葉をあれこれ噛みしめて来た。今日聴く御言葉は、キリストの復活のみならず、私たちがやがてなるであろう「死者」、も個別に復活するということ。

「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけなのか(1コリント 15:12)」。

コリント教会内の誰かが「死者の復活などない」と主張して、教会が動揺しているらしい。そもそも「死者復活」の納得は難しいが、理性を重んじるギリシア世界の教会ではとりわけ爆弾であった。

他宗教や反キリスト教の立場で、人間イエスに共感する人は多い。イエスの言葉やふるまいは、いわば思想や倫理として教会外の人々にも相当な説得力をもっている。ところが教えの中心であり、イエスが命を献げた十字架の贖いや復活となると、とたんに興味の扉は閉じてしまう(使徒 17:32)。

それにしてもなぜ、「死者の復活はある」としている教会で、その信徒が「死者の復活などない」と言い出したのだろうか。彼にとって復活の何が否なのか。二つのタイプの復活拒否が考えられる。一つは、死者の復活そのものの否定。二つは、キリストの復活は認めても死んだ信徒まで復活するはずがない。手紙の文脈から判断すると、おそらく後者がコリント教会を揺さぶっているのだろう。

「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずだ(1コリント 15:13)」。ただこれだけの、聴き逃してしまいそうな文言だが、思い巡らせてみると、実に多くの真実が暗示されている。

キリストが人間として生まれ、まぎれもなき人間として十字架で死んだ。人間のその死の領域からキリストは復活された。だから私たちが死を迎えても、この人間の死の領域から復活するのだ。キリストは私たちの地平に降り、人々に語り、癒し、解き放ち、奇跡を現わした。そればかりか、世の罪を負って十字架で死に、私たちの死の領域にまで降られた。そしてキリストは甦り、私たちに対して、死から復活への道を開いてくださった。この道は、私たちの目前に、今まさに開かれている。

「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられた(15:20)」。「アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになる(15:22)」。私たちの復活は、キリストによって為される。復活を戴くためには、理解力や敬虔さ、信仰心といった自力の類はまるで不要。ただ「はいっ」と差し出された復活の恵みを受け取ればいい。教会生活では、ふいに差し出される恵みを、「はいっ」と躊躇なく受け取れる柔らかさを養いたい。

「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはず。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなし(15:16~17)」。キリストの復活を信じて、自分の復活が信じられなければその信仰は虚しい。人生が有意義に見えても、何かしらの欲望の達成、他者の賞賛や自己承認欲求に反応し、それを満たすだけでは虚しい。キリスト者は無力を本願とし、そこに捉われない。

「高い天に対して何ができる。深い陰府について何が分る(イブ 11:8)」。私たちは己が無力に感謝。

キリストを讃える 人の賞賛ではなく神の栄光 そりゃそうだが 神讃美が習い性となり 私はあなたかも傍観者 だがキリスト復活の流れは私に向かって来る 当事者として受けとめにゃなるまい

5/15(土)はメディカル・カフェ。5月は総会が多く聖書研究会は休会します。甲府の聖研は5/17(月)に開会。牧師の動き:5/10 教誨師理事会と総会。5/12はYMCAで聖書の話。5/13は4件の個別教誨。

礼拝堂・集会所の住所: 408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ: 408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳伝道所」で検索して下さい。